

うたうたい。

七瀬 佑衣  
nanase yui

夢を追った。  
3万人の中の、ただひとりの歌声。

小さな頃、一本道を歩きながらいつも同じ歌を歌っていた記憶がある。  
雨上がりには水たまりに小さな顔を映し出して、笑顔の自分に挨拶を試みたり。  
鏡に映った自分のワンピース姿を見て、少しポーズを決めてみたり。  
誰かはきっといつしか歌うことを忘れてしまっていて、何かに懸命なものを見つけたと言っては  
いつかどこかで歌うことを思い出していたんだろう。  
鏡の前ではいつも笑顔を気にしていて、そのたびに鼻歌は常にどこにでも溢れていた。

歌うことが大好きだったあたしには、将来の見えない糸を手探りで探る思いなど、ホントだった  
ら気にしないでいられたのかもしれない。  
将来のことについて悩んだのは、あたしがいつかその未来が自分の夢として実現するかもしれな  
いという人生の岐路に立たされた時だった。

大きな夢。

大きな希望。

これからの道。

親の想いを知るより、自分の人生の悩みなどこれっぽっちもないふりをして、人生の中にそんな  
大きな夢の先を見ていた。

道を見ていたのはあたしばかりで、道のない話をするなど、心を突き刺すような親の猛反対を受  
け止めた。

泣いたのは、きっと未来に希望を見据えていたから。

親の怒りなんて、自分にとって何の意味にもならないものだと、その時感じた。

親に道を決められるわけじゃない。

親のために生きるわけじゃない。

まるで夢を持ってはいけないと言われたかのように、閉ざされた何かは自分の中で大きな塊にな  
りかけていた。

自分を押し込めたのは、先へ進めないジレンマ。

廉の歌声が聴きたいと思った。

安らぎはいつも廉のそばにあったような気がする。

『なんだよ、また来たの？』

いつもの何気ない廉の対応に、ホッと自分の心がいつもの居場所を探し求めて廉に訴えた。

『"FAKE"が聴きたい』

暖かい部屋の中で、甘いストレートティを飲みながら廉は明るく笑った。

『そんなに簡単には歌わないよ』

心にはいつも何か不安ばかりが存在していて、廉の言葉にいつも安心を求めている。

紅茶の香りを楽しみながら、廉はいつも笑顔で何かを考えていた。

静かなエアコンの稼働音が聞こえなくなった頃、廉が『FAKEね・・・』と呟いて、ギターを手にした。

もうすぐ、景色は白一色に変わる。

冬はどこかに置き去りにされたかのように、まだまだ外は暖かい日が続いていた。

ギターが鳴り響くと、あたしはゆっくりと目を閉じた。

F A K E

lyrics&music:REN

明日は何を想う？  
君の横顔が見たくて  
笑顔はいつも優しかった

ONE DAYS  
いつか辿り着きたい  
君の声が聴きたくて  
いつも何を見てる？  
いつもそばにいたよね  
優しさを求めて  
愛なんて言葉も忘れるくらいに

忘れた記憶も想った毎日も  
すべては君のそばにいたから  
いつも思い出してみよ  
この言葉が  
君の心に届きますように・・・

いつも何が映ってた？  
微笑みはいつしか痛みが変わるの？  
涙の跡も残した傷跡も  
君のように伝えることもできなくて

いつか笑っていてよ  
僕がそばにいるから  
明日が見えないなら  
僕が言葉で伝えるよ  
今日という日が永遠に変わりますように・・・



部屋から見えたものは、いつも一人という空間を少しの安心感に変えた、あたしだけの世界だと思いついていた。

そこにまだ廉はいなかったし、そこにあったのは確かに現実で。

廉を思い出す時、あたしは今の自分を想うこともできた。

廉の存在が、自分の夢と重なった時を知っている。

その時の廉の笑顔やその存在の尊さに、すべてを重ね合わせてもいいぐらい、一人という悲しみを知るすべを持つこともなかった。

いつも、歌っていた。

廉の歌声に、あたしの言葉に、その瞬間に、あたしたちは今を生きるということの難しさを知っていた。

窓を開けた瞬間の清々しさを知っている。

空の青さを知っている。

暖かい風を受ける喜びを知っていた。

笑顔が、自分を生かしてくれると信じていた。

午後の空間は、部屋の中には存在しなくて。

廉のいた場所が、あたしの存在を知ってくれる唯一の場所だと信じていたくて。

愛情を求めたこともあったかもしれない。

そのたびに、廉はあたしを笑った。

「オレを見るんだ。求めた今ってさ、ただ自分が迷ってるだけなんじゃないの？」

廉は、いつも歌ってた。

響いた歌声には、未来への希望や今の自分を追い求める何かを感じることもできたし、その未来にあたしを見ることだってあった。

そこにあるのは、確かに廉が求めるものに過ぎなかった。

だけど、そこにあるのは、あたしがいた記憶でさえも見えないぐらいの廉への想いだと気付いてほしくて。

そこにある現実と夢の空間は、廉がいたから、あたしがいたから、記憶に変わる毎日だったといえたかもしれない。

「毎日ってさ」

心地よい午後の陽射しに目を細めながら、廉がゆったりと話し始めた。

「誰かがそばにいたから、幸せでいられたのかな」

シンとした部屋の片隅で、ギターを抱えた廉の姿が、午後の陽射しを受けながら、浮かび上がる幻想のようにその存在を映し出していた。

知らない言葉を求めるように、あたしにその意味を教えることもなかった。

だけど、生きていくすべてが廉であるように、生きるそのすべてが廉に見ることがあるのなら、それが廉を感じてくれるその想いに変わるのかもしれない。

「あまり、わかんない。そばにいたら、ずっと一緒にいたいって思うだけだもん」

あたしの言葉に、廉がクスッと笑った。

「麻央（まお）らしいね。そばにいたら、きっと好きになっちゃうかな」

「人を愛したことあるの？」

少し間を置いて、廉はあたしを見つめた。

「あるよ」

「怖くなかった？」

「怖くないよ。何で？」

「人を愛することなんて、もしかしたら簡単なのかもしれないじゃない。でも、もしその愛を失うことになったら、怖くて仕方がないかもしれない」

「愛せなくなった時の苦しみは、確かに知ってる。愛した時の喜びも想いも、もしかしたら一人の人を愛した証拠だからこそ、人への苦しみに変わっちゃうのかもしれないね」

「廉は今、誰かを愛してるの？」

そんなあたしの言葉に、おもしろそうに廉は笑った。

「何、急に。誰も愛してなんかいないよ」

「ホント？」

「歌うことだけだよ、オレ」

「廉を愛した人は、きっと幸せだったのかな」

ニコッと笑った廉が、天井を見上げるようにして答えた。

「愛した人には、幸せであってほしかったな。でも、苦しみに変わるぐらいなら、いつも笑顔でいてもらいたくてしょうがなかった。オレを愛してくれるなら、オレのすべてを捧げてもいいくらい、人を愛したかもしれない。離れた時に、気付くこともあったし、そこにオレがいてもらいたくてしょうがなかった。オレが愛したら、きっと幸せであってほしいと願ってるよ、きっと」

静かな部屋の中では、そのすべてが廉の空間であるかのように、心地よい陽射しはそのすべてを物語ってくれていた。

午後に好きでいられた今がある。

その中に、きっと暖かな何かを感じていける。

「あたしは、きっと愛したことなんてないから、人を好きになることだってまだ知らないかもしれない」

少し真顔になって、廉はあたしを見つめた。

「好きになった人はいないの？」

「うん」

「初恋もまだなんだ」

「わかんない。本気で人を好きになることの気持ちも、まだよくわかんない」

「へえ」

いつもの笑顔で、廉は笑った。

時折、聞こえてくる外の喧騒に、いつもの風景を思い描きながら、廉の言葉がその部屋を彩る様を見ていた。

「人を愛することを覚えていけたらいいね」

ゆっくりとつないだ言葉と言葉の狭間で、あたしは心地よい廉の想いを実感していた。

廉が、そこにいてくれたらいい。

いつまでも、廉の笑顔を見ていたい。

同じ夢を追うことも、同じ時間を過ごすことも、そこから何かを感じることも、すべてが同じであるように。

その場所に、二人の空間があることの今を感じていきたかった。

「同じものを感じていきたいね」

響いた廉の言葉を、ただ目を閉じて実感していた。

「一緒にいたっていいよ、オレと」

静かな部屋の中で、廉だけの声が響いていた。

暖かな日差しなんてなかった。

木漏れ日にもならない光は、ただ二人だけの空間を照らすだけだった。

光の弱い部屋の中は、まるで幻を見ている夢の中のような感覚だった。

「寂しい気持ちって、廉にはある？」

あたしの言葉を聞くと、廉はクスッと笑って気だるく答えた。

「あるよ、そりゃあ。一人でいるのが苦しい時もあるしさ」

「一人って、嫌なの？」

「別に、嫌じゃないけどね。一人の空間を意識したこともないしさ。誰かはきっといつもいるだろうし」

あたしは、少し安心して微笑んだ。

静まり返った部屋の中で、ただ廉の呼吸を意識した。

廉が手を差し伸べる。

巻かれたカールの毛先を少しつまんで、廉が静かに笑った。

「オレと、生きる？」

呼吸は、静かな部屋を包んだ。

止まらない感情を知ったことがなかった。

頷くあたしを包み込むと、廉の大きな胸の中でのあたしはただ静かに目を閉じていた。

初めて、歌った記憶。

あたしがあたしであった頃。

笑顔も喜びも、素直なままに、ただ歌った記憶の中でしか生まれなかった。

あたしが生きた過程を、一番の記憶として残した歌声も、いろんな思い出も、いろんな想いも、そこに廉がいたことや、意識した毎日はすべて廉の存在を尊いものにしてしまった日のことや。廉を意識して、毎日は続いていた。

廉の笑顔を見たくて、笑顔は苦しみに変わることなんて知らず、ただ廉が言った言葉に、少し悩んでいた日々のこととか。

進んだものは、ただ廉を生きていくための何かを見つけてくれたみたいに。

そこには、廉の進む未来が存在していた。

「夢って、いつも廉をつないでくれてたのかな」

少し寂しそうにあたしが訴えると、いつもの廉の笑顔は見えないでいた。

「オレの夢について？それって、オレの道を言ってんだよね。進むって何だろね。オレは別に、夢を持ったこともないしさ、それを夢に見たことも・・・あったかもしれないな、でも。麻央は歌が大好きだよ。オレが歌うのが好きなの？」

「うん」

「そうなんだ。自分の歌じゃないんだ」

「ううん。廉の歌が大好き」

少し照れくさそうに笑うと、廉がうつむき加減に呟いた。

「あんま言われたことないな、それ」

笑顔は、いつも同じだと思っていた。

いつもそこには廉が笑っていて、毎日は楽しい瞬間で、廉のそばにいるのが当たり前だと思っていた。

歌声は、いつもそばにあったし、廉の一言一言が大好きな毎日につながっていた。

「みんな、廉のこと愛してくれるかな」

安心した笑顔を、廉は感じてくれたのかな。

眠そうに目を細めながらも、廉は答えてくれた。

「あんま、意識しないようにしてるんだよ。環境が変われば、いつもの風景も見えなくなるような気がするんだよね。確かに、誰かはオレを見てくれるんだろうけど、将来なんてさ、実は毎日が自分のためにあるってことがいつかはわかるような気がしてさ。明日、誰がオレの曲を聴いてくれるだろう」

「あたしが、ファン第一号になってもいい？」

二人で笑い合った記憶が、今の瞬間にもあったことの幸せを、いつかは大切なものであったと実

感する時の悲しみは、どこにもつながらないでいてほしい。

いつもは、そこに廉がいて、その場所をあたしの場所として存在していたかった。

あたしを見た廉はいなかったかもしれない。

いつもあった廉の記憶の中に、あたしがいた日々はどう残っていくんだろう。

大切なもの。

廉は、きっと変わらずにいてくれる。

大好きだった廉が進む未来に、あたしがいないことはわかっていた。

いつもいた廉があたしを感じてくれない時、誰が廉を感じていくんだろう。

それがあたしではないことに気付いた時、廉が人を愛したことのある日々を知った瞬間のあの日を、廉であってほしいと願ったあたしの想いを、廉はいつか感じる時があるのかな。

きっと、あたしの想いがつながることもないだろう。

廉が言った言葉と、そこに廉がいた記憶を、廉はただ進む未来の中で感じるすべての人たちに見ることもないだろう。

そこにあった廉を想うことと、これから廉の生きる過程の中に存在する人たちの想いは、知らない廉を見ていくことへの寂しさを感じる日々に、二人の道が違うことを教えてくれた瞬間でもあるのかもしれない。

「同じ場所で生きてもいいんじゃない？」

ふいに聞かれた言葉に対して、あたしはあまり答える言葉も浮かばずにいた。

「麻央がその世界にいたら、オレはきっと幸せなのかもしれない。一緒にいたいのかな、オレ・・・もしかしたら」

不安感はいつかなくなると信じて、毎日はあったような気がしていた。

不安は、廉の中でどんな想いとしてつながっているんだろう。

あたしには見えない廉の想いが、いつかはわかる廉の姿としてそこにはまだ存在してはいけないかのような、廉の言葉は見えない未来への希望になりかけようとしているのかもしれない。

「不安だったら、あたしは廉のそばにいてもいいの？」

見つめるその姿を、ただ今であるしかない想いとして、少しの寂しさと共に時間が過ぎたような気がしていた。

「一緒に生きるって、そばにいることなのかな。それとも、同じ世界で生きていくことなのかな。何年か経ってさ、そこにオレがいて、麻央がいて、二人が同じ世界を生きていたとしたらさ、オレはきっと幸せを生きたって言えるのかもしれないよ。オレと生きるって決めたのは、同じ道も見ていくって二人が在るんだってことを、オレは考えていたかもしれないよ。オレが麻央をもし選んだんだとしたらさ、麻央はオレの道を選んでくれるの？」

何もない空間には、ただ二人の想いだけが存在していた。

何もない場所。

何も存在しない場所。

ただあるのは、二人の未来を意識した空間だけ。

もし、あたしに未来があるのなら、そこには廉がいたことを望んでいた未来があったのかもしれない。

ない。

二人の場所は、いつまでも二人だけの場所だと言っていた時のこと。

ただ、記憶は幸せだけではないのだと、いつかわかる時があるような気がして、不安は二人の中には存在しないのだと信じていきたかった。

「選べない。だって、あたしは歌をやめたから。ただ、あたしは廉だけを想ったよ。大好きだった、廉の歌声も、廉の姿も、廉の笑顔も、想いも、その世界も。一緒に生きたかった。同じ未来があるなら、そこには廉が想ったあたしが、もしかしたらいないのかもしれない」

「そばにいて一緒に生きていけるなら、オレの道に麻央がいてくれたらいいよ」

二人で生きることを望んだ日のことや、二人で未来を語り合った夜のこととか。

いつも一緒にいた記憶も、いつもの風景や、そこにいた人たちの想いも。

明日になれば、廉はみんなの廉になることや。

そこから廉の生きる道があったこと。

あたしは、廉の姿をただ想いに変えたあの瞬間と同じ気持ちで、廉だけを想うことができるのかな。

廉が望んだあたしでいたかった。

廉の想いは、いつかあたしではなくなるのかな。

あたしの気持ちを、きっと廉は知らないでいる未来があるのかもしれない。

つないだ手は、誰よりも暖かかった。

朝になって、自分の部屋で静かな空気が流れているのをただボーッと天井を眺めるようにして見ている。

シンとした部屋の中では、いつもある空間といつもとは違う自分の姿があるように感じた。

廉からもらったCDを流したまま、昨日は寝てしまったようだった。

耳元でリピートしていた曲が終わって、再び最初に戻った時、無意識に眠りから覚めたままの姿で、その曲を止めた。

朝のおぼろげな光が、少しの安定と安らぎを与えていたことを、今の姿を映し出したままの自分をただ過ごしていくだけの毎日とは少し違う形としてそこにあることを、ボーッと見つめているような、そんな幻にも似た1日の始まりを感じていた。

リビングに行くと、小さな音声で朝の情報番組が流れていた。

毎日とは変わらないいつもの風景が、そこには存在していた。

コーヒーを飲んでいたお父さんが、情報番組から目を離して、あたしの姿に気がついた。

「早いな、今日」

少し笑みを浮かべながら、再び情報番組に目を移した。

「おはよ」

少し遅れて挨拶をすると、何も言わずにただ漂うコーヒーの香りを楽しむかのように、朝の始まりを意識するお父さんがいた。

「お母さんは？」

テレビから目を離さずにその言葉を耳にすると、お父さんはキッチンの方に目を移して答えてくれた。

「向こうにいるんじゃないか」

何も音がしないキッチンでは、お母さんの姿が見えずにいた。

「さっき、目玉焼き焼いてたよ」

「ホント」

少しおかしくてあたしが笑うと、お父さんも少し微笑んだ。

いつもと変わらない朝。

でも、どこか違う朝。

緊張なんてしてはいなかったし、何かを期待する気持ちも全くなかった。

だけど、そこにはいつもあった風景がまるでなくなってしまったかのように、いつもとは違う始まりがそこに存在していたように感じていた。

廉が、この街からいなくなった日。

スタートはいつも、希望から始まっていた。

廉がその中にいたことを、あたしはいつも感じていたんだ。

廉の姿が、いつか違う世界から見えてくることを望んでいた。

あたしの夢が、いつしか廉の夢へとつながっていたこと。

何気ない風景の中に、いつもとは変わらない家族の風景がそこにはあった。

何気ない一言も、何気ない風景も、仕草も形も、すべてが鮮明な記憶へとつながることを感じながら、あたしはその場所に存在していた。

廉なら、こんな場面をどう感じるだろう。

今、廉は何を想っているだろう。

廉の姿を、廉の感触を、廉の声を、ただ毎日は当たり前のように過ぎていたことを、毎日は廉の言葉をただ眺めるようにして過ごしていたこと、感じたことは廉への毎日の想いへとつながっていたことに、廉は毎日感じながら過ごしていたんだ。

歌声は、今どこに流れているんだろう。

不安はなかったし、安心はどこか不安定と共に存在していたようにも感じていた。

「おはよ。ミルクでいい？オレンジ切れてるんだけど」

ふいに後ろから、お母さんが声をかけた。

振り返って、忙しそうにミルクのふたを開けるお母さんの姿を見届けると、あたしは頷いて答えた。

「うん」

変わらない朝でよかった。

毎日あって、よかった。

そこに始まりがあっても、あたしは何も悲しまないでいられる。

朝の白い風景が、あたしを包んでくれていた。

夢追い人

lyrics&music:REN

鮮明な明日  
空虚な午後  
夜には星のない道で  
朝まで届かなかった夢を

空に星を見つけた朝  
夜には見えなかった星たち  
夢を追ったあの夜に  
キミの涙を見ていたんだ

悲しみは記憶に留まらず  
笑顔はいつもそばにいたキミのままで  
涙など見せなくてよかったね  
あの日の涙を  
キミはどう感じただろう

同じ未来を生きたから  
そこに失うものなどなかった  
いつまでもそばにいて  
いつも笑ったままでいて  
あの日誓った約束も涙の跡も  
空にはいつも雲がかかるように  
そこにキミの姿があるように  
僕のそばにはいつもキミがいただけ

月のない夜  
月がかかった朝  
消えてしまった夜の月  
いつかはまた光る月の幻想  
キミが見えない夜のために



廉の中には、常に愛した人がいた。

いつも話していた言葉も、その姿もその瞬間も、いつも見ていた廉の一瞬を、あたしはただ垣間見るだけの、いつもの風景がそこにあるように、廉の姿はあたしが感じるその一瞬の今でしかない、いつも感じていたりした。

廉は、誰を想っていたんだろう。

廉の姿を、ただ愛される記憶にしまえるほどの想いを、どう感じながら、廉を想っていたんだろう。

初めて見た時の、廉の笑顔。

廉の言葉に見る、いつものありふれた世界。

廉がいた記憶。

廉のいる毎日。

いつも、そばにあった廉の横顔。

昨日まで聞いていた廉の声も。

廉の想いも。

ただ、今では遠く感じるほどに、近くにいた瞬間の記憶も。

すぐそばで見た廉の笑顔を、近くに感じることもなく、ただ毎日は廉の風景を眺めては想うだけの毎日だった。

『麻央の歌、聴かせてよ』

輝くほどに鮮明な声で、廉の希望を聞いたような気がした。

昨日まで、近くにあった存在。

『一緒に歌おっか』

半分、冗談交じりでそう笑った廉と、ギター片手に歌った記憶も。

昨日までは感じていた暖かい感触も、一人部屋の中で聴いてみた廉の歌声に重ね合わせて、違う世界を生きている廉の姿を、どう感じていけばいいのか、戸惑う一瞬でもあったりした。

涙なんて、出るわけもなく。

ただ、寂しさなんて当たり前だと過ごせば、それも愛し方のひとつだと実感することもできるのに。

愛を感じる一瞬の喜びを、ただ今を捉える愛し方のひとつにしてしまうぐらいに、廉は今のあたしを愛し続けてくれた。

昨日の廉を、ずっと感じていたかった。

『おやすみ』

愛してるを何回聞けば、あたしの心は安らぎに変わるんだろう。

廉は、いつその言葉を本当にしてくれるんだろう。

廉の言葉に、愛してるを重ねることの難しさを知っていた。

『愛してるよ』

笑顔を垣間見せる姿のほんの一瞬に、廉のおぼろげな姿が映っていた。

本当の姿を、廉はいつあたしに見せてくれるんだろう。

廉の胸の中では、不安も恐怖もないままに、包まれた感触をただ目を閉じながら感じている一瞬を、愛情だと知った。

歌をやめた頃、何を感じながら毎日を送っただろう。

親はいつも平穏に過ごして、バイト先へ向かいながら、日々はありふれた環境の中に身を置いた自分を感じながら、普段から遣い慣れた言葉を口にして、友達と笑い合って、廉と違う世界を生きて、想いを抱いて、時たま同じ世界に生きてみたいと何度も思った。

『一緒に感じっていいよね』

笑いながら、廉は言った。

いつも伏し目がちな表情を目にしながら、毎日は廉のためにあるのだろうか、なんて考えながら、日々は歌と共に、廉と共に楽しい日々の連続だった。

『いつも同じでいたいって思うんだよね、なんか』

『みんな、同じかも』

『オレといるとき、毎日がどんな感じなんだろ』

『・・・楽しいかも』

『ホント。嬉しいな～、なんか。麻央も楽しいの？』

『うん、楽しい』

『好きだな～、なんか。そんな感覚』

『廉は、毎日いろんなこと考えてそう。でも、楽しいのか嬉しいのか、ちょっとわかんないかも』

ギターを少し鳴らして、廉がうつむき加減に笑った。

『なんも。毎日、歌ってて楽しいよ』

『いつ、ステージに立つ廉を見れるんだろ』

『何それ。緊張するな～、なんか。ないよ、たぶん』

マグを手にとると、一口すすって、笑った。

いつも、廉は笑ってる。

穏やかさは廉の特徴で、いつも世界は廉のためにあるような、そんな気がしてた。

いつも、同じ場所にいたかった。

廉の、そばにいたかった。

秘めてしまったのは、きっとまだまだ廉の場所には届かないでいたから。

『歌う廉が好き』

少し間を置いて、相変わらず笑顔で廉は答えた。

『オレが好きなの？』

『わかんないけど』

『そう』

少し、無意味に時間は流れていた。

同じ空間にすることで、大好きな廉のそばにただ、ただ幸せに想えた自分の今の世界には、たった廉だけの世界があるだけだった。

『オレは好きだよ、麻央のこと』

曖昧な感情と、明確にみえた言葉の感覚が、何となくアンバランスに動いていた。

沈黙なんて、ありふれてる。

初めて、廉の表情を見たような気がした。

ギターを鳴らしながら、何度かチューニングを繰り返していた。

『一緒にいるって、いいよね』

また笑顔で、廉がそう言った。

何も言わず、あたしはただ頷いた。

『オレと麻央は、両想いになれるかな』

ギターを演奏しながら、楽しそうに廉がそう言った。

心には、廉がいっぱい。

歌は、いつも廉の周りに溢れていた。

澄んだ歌声と、いつも流れていた音楽と。

そして、あたしの歌声と。

『うまいのに』

残念そうに、いつも廉は答えてくれた。

少し恥ずかしくて、あたしはいつもの生活が楽しいからいいよと、そう思うたびに、夢を追う姿がもし廉と同じものだったら、もう少し違った廉との世界観があったのかもしれない。

『また、明日』

そう言って、廉は玄関で見送ってくれた。

ドアが閉まるまでの間、笑顔は絶えることなく、また明日逢えると思ったらなんか幸せで、手を振るあたしの笑顔と、最後まで笑顔でいてくれた廉との距離感は、何となく毎日の繰り返しの中では自然な形でそこにあったような気がしていた。

もうすぐ、寒い季節がやってくる。

いつか、二人は世界を創るのだろうか。

いつか、廉の歌声は世界を巡るのだろうか。

夢は、いつも廉のものであって、いつかは廉の現実感につながると信じていた。

同じ記憶。

同じ時間。

同じ場所。

同じ想い。

いつか、夢が進んでも、二人のいた場所にはいつも二人だけの世界があったことを、いつまでも感じていたい。

廉が、たとえあたしだけの廉じゃなくても。

days.

lyrics&music:REN

いつも見ていた横顔も  
いつも感じていた姿も  
涙も記憶も傷跡も笑顔も  
季節は何のためにあるのかとか  
毎日は誰かを想うだとか  
幸せの定義なんて言葉を口にして  
ちょっと幸せ感じて  
ちょっと孤独を感じて  
いつかは夢を見ているの？  
いつかは愛を感じているの？  
いつか幸せ感じて  
いつか孤独を越えて  
夜はなんのためにある？  
朝がきたら、何を願う？  
いつか、始まりを意識できたなら  
いつかはやがて進んでいけだろ  
空はいつも流れていたんだし  
いつか見る空のために  
毎日はあったんだし

何も変わらずにいた、廉の笑顔も。  
遠くに感じた、今日の姿も。  
ライブでは、違う姿を見せていたことも。  
笑顔は、誰のためにあるのかを考えたこと。  
言葉に想いをのせることの意味だとか。  
誰かに伝えた声。  
誰かのためにあった廉の歌。  
廉が笑うと、世界は止まった。  
誰かが泣いていたし。  
誰かは笑顔を大切にしていた。  
涙は誰かを幸せにすると、廉は言葉にのせていた。  
誰かのために、廉は在ったのだなんて。  
少し、あたしのために抱いた想い。  
廉は、あたしを想うだろうか。  
廉は、誰かを想うのだろうか。  
きっと、幸せは廉のそばにあった。  
みんなは、幸せを見ていただけなんて思ったり。  
そうしたら、廉は笑った。  
みんなのために、オレは歌おうか。  
笑顔は大切だよな。  
幸せって、いつもどこにあるのかな～なんて、ね。  
オレってさ。  
歌以外、なんもないんだよ。  
やり尽くしたこともいっぱいあるけどさ。  
何が楽しいかって言うとき。  
やっぱ、みんなの前で歌ってる時が一番いいかな。  
オレがいるって、何だろ。  
みんながいてくれたことってさ、すごくキセキだよな。  
出逢いっていくらでもあるけどさ。  
一瞬でも、みんなに出会えたことを幸せに想えたんだよな。  
また、いつかこのライブで会ったら、笑顔を大切だと言える自分で在ってほしい。  
再会、楽しみにしてるよ。  
じゃあ。

またね。

マイクを手にしていた廉の姿を、いつも変わらずにいた廉の姿のように映してみたら、遠くに感じていた廉の後ろ姿に、いつもの廉の笑顔を感じとることもできずにいた。

誰かはきっと、廉を感じる。

誰かはきっと、廉を必要とする。

誰かのために、自分があるっていいよね。

いつか。

廉の言っていた言葉も、誰かのためにある言葉に変わる。

廉は、誰を感じる？

いつもは、誰かのためにあるの？

夜はいつも寂しくて。

でもそこには、廉の姿を追うこともなく。

そうしたら、廉はあたしを想うこともないのかだなんて。

いつもの夜は、いつもの風景には似ない悲しみを抱いた幻想になった。

そこに、廉はいるのかもしれない。

廉はきっと、あたしの知らない道を歩いている。

今でも知らない廉の新しい姿を、誰かはきっと見つけることができたりする。

そこに、あたしはいなかった。

同じ道を選んでいたら、廉はきっと幸せを想っただろうか。

廉を見なくなってから、日々はとても忙しくて。

廉の姿を遠目で見ながら、二人の間に何かを感じることもなくなっていた。

メールにのせた言葉で、廉の想いを知ったり。

メールでは伝えられない想いを、廉の言葉で伝えてもらったり。

廉は、いつも同じ言葉を口にする。

誰かもきっと、それを聞くことだってあるんだ。

あたしはただ、廉の想いが本当かだなんて。

そんな人にはなりたくない、本気で訴えた夜。

笑った廉を、いつもとは違う感情になっていたことをうまく伝えることもできなくて。

ぎこちない毎日の連続を、廉は知ったことがあるのかな。

「好きだよ」

いつか、廉のために毎日が終わっても。

そこに廉が存在するなら、毎日なんてなくなってしまってもいい。

廉だけになってしまったら、あたしは苦しんでしまうのかな。

廉は、また笑うのかな。

オレだけのために、麻央がいてね。

そしてまた、明日になれば廉の歌声が聞けるんだろうね。

毎日は、知らない間にあたしを笑顔に変えていた。

廉と、一緒にいた日々。

いつか存在する、二人だけの道。

信じることに、何かを感じた毎日。

誰かのための、いつか。

誰かのための、毎日。

廉だけの、言葉。

あたしだけに、くれた幸せ。

廉の笑顔の行方と、本気で愛したこれから。

明日。

きっと。

すべてとまでは、言えないだろうけど。

廉だけのためにあった、あたしの道。

necessary.

lyrics&music:REN

毎日の横顔 見慣れた風景  
過去も記憶も声も街並みも  
笑顔はいつもそばにあって  
声はいつも耳に響いてた  
出逢った頃によく聴いた曲  
大好きだった風景も  
毎日を繰り返した二人の軌跡  
いつか遠くに感じていた  
涙を流したあとも  
ずっとそばにいたい記憶も

明日を感じる頃には  
いつも1日の終わりを感じていた  
繰り返す毎日の中で  
少し安心のない1日の始まり  
いつも続いていく二人の軌跡  
不安は同じ道を歩いてるから  
同じことを想うから  
同じ時間を過ごした尊い軌跡

儚い記憶 一緒にいた時間  
出逢ったキセキ 昨日の悲しみ  
今日の笑顔 明日の幸せ  
いつもの軌跡

涙を流したのは、もう随分と前になる。  
誰かの涙を見たのも、たった昨日見たばかりなのに。  
痛みも傷も、何もない。  
何かを求めて、何かを信じて、何かを感じて、誰かを愛して。  
だけど、毎日は何だか空虚な自分を感じていた。  
歌ってる自分は、違う誰かって言ってみた。  
痛みなんて、全然ない。  
だけど、笑ったら心が不自然を感じた。  
自分は、痛みなんてないって思った。  
きっと、誰かを求めてたりする。  
誰かが笑顔をくれたりする。  
毎日を、オレは喜びの歌に変えようとしていた。  
痛みはなかった。  
出来上がったのは、幸せになりたかった歌の世界。  
痛みは、もしかしたら知らない間に創られたかもしれない。  
オレは、痛むことなんてなかったから。  
歌は、違う誰かのために痛む心を謳った。  
いつか、また涙を流すだろうか。  
誰かのために、泣いた記憶。  
自分の感じたあの日を泣いた記憶。  
誰かがそばにいてくれた。  
誰かの記憶も、そこにいてくれた。  
懐かしい曲も、誰かも、笑顔も。  
時間が止まってしまったかのように。  
いつかに帰りたいかった夜。  
過ぎたことを、いつかまた想うだろう。  
だから、歌っていた。  
だから、みんなが笑っていた。  
痛みなんて、なかった。  
オレはいつも、痛みなんてなかった。

いつしか、目の前には人ばかりでいっぱいだった。

いつも、見渡す限りは人で埋め尽くされるようになった。

音楽はいつもそこに在り続けていて、歌声から響く言葉のひとつひとつが、きっと誰かの心に残っていくのだと、毎日は日常だとは言えなくなった日々の中の、様々な言葉の意味を、いつか誰かのもとで感じる一瞬になればいいと、ただ願うだけだった。

オレは、どこまで歌うんだろう。

いつの頃か、自分の姿が見えるだろうか。

誰かのために、どんな日々の中に、自分の意味だとか、自分の生き方だとか、そこにいた自分も、歌声も、すべては誰かの『自分』のために。

いつか、幸せでありますように。

いつも、幸せでありますように。

——そこに、在り続けた自分と、自分の生涯愛し続けた人へ。——

E N D.

END.

---



# うたうたい。

著者：七瀬佑衣

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier  
運営会社：株式会社ブクログ